# 2013年3月12日（月曜日）の下野新聞に弊社ボランティアの記事が紹介されました。



下野新聞

東日本大震災2年
3.11から
ともに
栃木↔東北 ①

## パン・アキモト

### ボランティアは今

那須塩原市
→福島県いわき市など

東日本大震災から2年が過ぎた。1年前、長く険しい復興への道中を歩む人々の姿を通じ、大災害がつないだ東北と栃木の絆を描いた。かつて紙面で紹介したボランティア、避難者は今、どうしているのか。彼らの〝その後〟を訪ね、再び、ともに歩いた。

「揚げたてだよー、食べてってー」

2月23日、福島県いわき市の「白水のぞみ保育園」。園庭に甘い匂いが漂う。目の前で次々揚げられるパン、ドーナツに親子連れらの目が輝く。おいしそうな匂いと笑い声に、近所の人たちも続々と集まってきた。

「本当はさ、1カ月くらいで本業に戻ろうと思っていたんだよ」。寒風の中、キツネ色になったまん丸いドーナツを手早くすくいながら、秋元義彦さん（59）は苦笑いする。

那須塩原市東小屋の「パン・アキモト」。秋元さんは、防災食の「パンの缶詰」を生んだ2代目社長だ。

震災直後、そのパンの缶詰1万5千缶を陸上自衛隊に託し、被災地にヘリ輸送してもらった。それが支援のスタートだった。

地震で配線が切れた製造機、計画停電に振り回される工場の製造ライン。本業さえ危うい状況。だが「家をなくした被災者に頑張れなんて言えない。『私たちが頑張るから大丈夫だよ』と言いたくて…」。社員や賛同者と何度も被災地を訪れ、パンや生鮮食品を配布して回った。

1カ月後、テレビ番組でアキモトの活動が紹介された。放映後から鳴りやまない応援の電話。「アキモトを応援して、東北を支援したい」。全国、海外から2千万円以上の支援金が届いた。

背中を押された。

### 出身は浪江町

今でも月に1回ほど、仮設住宅に出向き、揚げたてのパンを提供する。特に行く機会が多いのは、福島県浪江町の人たちが避難している二本松市などの仮設住宅。新入社員の中島七虹さん（19）が同町出身だからだ。

高校2年だった中島さんはあの日、学校前で被災した。津波で同級生を亡くし、全町避難区域となった故郷を離れ、家族と別れた。

笑顔で揚げたてのドーナツを手渡す中島さん。「地元に戻ったら、浪江の住宅街にパン屋を開くのが夢」＝2月23日午後、福島県いわき市

## 笑顔呼ぶ揚げたてパン
## 続く 仮設へぬくもり

「白水のぞみ保育園」をこの日訪れたのは秋元社長以下、中島さんら社員4人。同園の近くには仮設住宅があるが、地元住民との交流は乏しい。明石義信園長（55）は「今必要なのは地域の人たちが集まる場」と言い、「集まる機会をつくってくれるアキモトの活動はうれしい」と歓迎する。

### 距離が縮まる

一行は避難者が入居する雇用促進住宅を訪れた。迎えた大谷慶一さん（64）は津波で自宅を失い、慣れない団地生活を送っている。

「自分の中にため込んでいたらおかしくなりそうで」と、語り部としてあの日を再生し続ける。だが胸の内は激しい葛藤だ。「あの忌まわしい記憶を忘れんと、復興の一歩目も踏み出せん」。

子どもにドーナツを手渡す秋元さん（左）。「困難な状況でも土地を愛する東北人の絆に心打たれた」という＝2月23日午前、福島県いわき市

ふさぎ込みがちな住民らが、部屋から出てきた。揚げたてドーナツのほんわりしたぬくもりと笑顔が迎える。

中島さんの出身を聞くと一気に距離が縮まった。「もう一度、故郷の海がみたい」と話す中島さん。「あなたも大変なのに、ありがとう」「こちらこそ、食べていただいてありがとうございます」。

そこには被災者も支援者もいない。いてつく寒さが、少しだけ和らいだ。

（三谷千春）

12年11月18日付

那須塩原の秋元さんら

### 被災地支援で祈りの人形届く

陸前高田 高齢女性

### 「感謝の心伝えたい」

仮設の部屋 手製の日々